

還流する移民

—— 中国と華人社会シンガポールを往来する中国人から ——

鍋 倉 聰

はじめに

華人、マレー人、インド人、その他から成る多人種⁽¹⁾・多民族社会として知られるシンガポールに、現在新たに加わっているのが、中国大陸出身者である。

国境を越えた人口移動が珍しいことではない中、この場合で特徴的なのは、シンガポールの人口の77%を華人⁽²⁾が占めることだ。中国大陸出身者とホスト社会のマジョリティとが、ともに「チャイニーズ」として括ることができるのである。

エスニシティ、ネーション（ナショナリティ）、ステートを用いて言えば、シンガポール華人と中国人は、チャイニーズとしてエスニシティを同じくすると言えるが、シンガポール人及び中国人として、ナショナリティは異なる。そして、シンガポールというネーション・ステートが、徹底した人種・民族政策、移民政策を通して関係するのである。この事例では、エスニシティ、ネーション、ステートのせめぎ合いが、見えやすい形で表れていると言えよう。シンガポールの中国人に関する予備的調査を踏まえた具体的事例から、これらの関係について考察を進めるのが、本稿の目的である。

本稿では、シンガポールにおける中国人増加のプル要因として、シンガポール政府の移民政策をとり上げ、それを多人種主義と呼ばれる一連の人種・民族政策に位置付ける。続いて、シンガポールでの中国人へのパイロット調査をもとに、華人社会における中国人の態様について明らかにし、最後で考察を進める⁽³⁾。

⁽¹⁾ シンガポールでは、「Ethnicity（エスニシティ）」ではなく、「Race（人種）」という語が公文書や日常生活で広く用いられている。これは、各「人種」間の違いを強調する多人種主義政策（後述）と関連する。

⁽²⁾ 本稿では、シンガポールなど中国以外のチャイニーズ系住民を「華人」とし、中国の住民を「中国人」とする。「中国人」と「華人」を合わせて言及する際には、「チャイニーズ」という語を用いる。

⁽³⁾ 筆者は、1998年から2001年にかけて、シンガポール国立大学に所属し、「シンガポール多人種主義に関する比較社会学的研究」というテーマで、団地でのエスニシティの発現形態について調査研究を行った。その過程で行う機会を得た中国大陸出身者に対する聴き取りをベースに、本稿は成り立っている。

1 シンガポールでの中国人増加と多人種主義

1—1 シンガポールでの中国人増加

かつて人口の往来が活発に行われていた中国とシンガポールだが、1965年に独立したシンガポール共和国が中華人民共和国と正式に国交を結んだのは、ようやく1990年のことであつた。マレーシア、フィリピン、タイといった周辺のASEAN諸国がアメリカ合衆国にならって1974～75年に中華人民共和国と国交を開いたのに比べて、シンガポールの国交成立が遅れたことについて、『『エスニックな理由』があるため、国交はASEANの最後にすると宣言した。中国に近づきすぎて、近隣諸国の疑惑を招きたくなかったのである』（綾部・石井編1994：223）というように、華人が多数を占めることを理由に説明されることが多い。

国交成立後、シンガポールと中国の関係は急速に深まった。1992年には、鄧小平が、「シンガポールの社会秩序は良いと言える。シンガポールは管理が厳しく、我々はシンガポールの経験を借りるべきで、それよりもさらによく管理していかなければならない」（鄧1993：378）と述べたほか、両国による蘇州工業団地の共同開発も始まった。両国間を行き来する人数も急増し、シンガポールを訪れた中国人は、1982年には1,276人だったのが、国交成立後の1991年には42,333人に増え、1999年には372,881人となったのである（『新中建交十年1990－2000』：184）。このうち、本稿では中国人増加に注目し、とくにシンガポール側のプル要因について、以下検討していく。

1—2 シンガポールでのプル要因

シンガポールでのプル要因として挙げられるのが、シンガポール政府の移民人口政策である。ゴー＝チョクトン現シンガポール首相が、第一副首相時代の1989年に行った次のスピーチが、それをよく表わしている。出生率低下への対策として、香港からの移民に大量の永住許可証⁽⁴⁾を発効することを決めた政府の政策を説明した際の発言である。

エスニック・バランスが崩れると心配する必要はありません。現在の私たちの社会の調和し

⁽⁴⁾ シンガポール政府から永住許可証を得て永住者となることを、本稿では「永住化」とする。永住者は、Permanent Residentを略して、「PR」と呼ばれる。また、市民権を得てシンガポール市民となることを、本稿では「市民化」とする。

た多人種のバランスを維持するのが、政府の政策です。人口が260万人でも、320万人でも、400万人でも、現在のエスニックのバランスが維持されます。もし華人の割合が76%を超えたら、[東南アジア] 地域からのマレー人やインド人の数を増やすでしょう。(Straits Times 1989/7/30, Siddique 1990: 38, 59-60)

移民を永住者化させることで人口を増やし、さらにその際に、現在の華人が多数を占める人種バランスを政府によって意図的に維持しようというのである。

シンガポールの人口政策が実際にこの通りに進められたかどうかは、人口統計を見れば一目瞭然のはずである。しかし、シンガポールでは、永住者化・市民化した移民の出身国別一覧、人種別一覧などのデータは、筆者の知る限り公表されていない。そもそも国勢調査は、国家にとって都合の良い政治的行為であるが、とくにシンガポールでは、その傾向が強いと言える。そこで本稿では、十年ごとに行われる国勢調査のうち、1990年と2000年の結果を比較することで、その一部を示すを試みる。

1990年の国勢調査によれば、シンガポール人の人口⁽⁵⁾は273.5万人で、そのうち、77.8%が華人、14.0%がマレー人、7.1%がインド人、1.1%がその他だった。それが、十年後の2000年には、人口は326.3万人へと50万人以上も急増した。市民の増加率が1.3%だったのに対して、永住者は毎年10%増加し、1990年には全人口の3.7%だったのが、2000年には7.2%を占めるに到っている。人口増加の多くが、大量の移民を住民に組み込んだことによることが分かる。しかし、これだけ人口を意図的に増やしたにもかかわらず、人種割合は10年前とほぼ同じく、各々76.8%、13.9%、7.9%、1.4%のままだ。人口の不自然増加の中、人種別割合は注意深く維持されたのである (*Census of Population 2000*, 1 巻: viii, 9)。

この不自然さは、シンガポール政府でも手を加えることが難しい1歳未満の子供の人口比を見ることで窺える。華人は69.9%、マレー人は19.5%、インド人は8.7%、その他は1.9%で、人口比と比べて明らかに華人が少ない(同 38)。

移民の永住者化の実態を示すデータとして用いられるのが永住者の人種別割合で、76.1%が華人、4.1%がマレー人、14.9%がインド人、4.9%がその他である(同 37)。マレー人が極端に少ない。永住者化及び市民化を総合したデータとして使えるのが、住民の出生国別の割合で、「中国、香港、台湾」出生の華人が14.5万人にのぼり、華人全体の7.1%をも占める(同 57)。また、海外出生のシンガポール住民のうち、80.1%が華人であ

⁽⁵⁾ シンガポールの統計では、国籍をもつ市民と永住許可を得た永住者を足した数が、人口とされる。

る（同 57）。

さらに、「数及び質の両方での人口減少に対するため、私たちは、移民政策を緩和し、永住者の地位を香港人に与えることを決めました」（*Straits Times*1989/7/30）というゴー第一副首相（当時）の発言にあるように、シンガポール政府は移民の「量」だけでなく「質」にも配慮している。発言の背景に、当時シンガポールでは、「人材」の国外流出が問題になっていたことがあった。意味政策はすなわち人材獲得政策なのである。住民化される移民は、シンガポール政府によって学歴その他で「人材」と見なされなければならない。

この流れの延長線上に中国人の人材獲得政策があり、それが中国人大量流入のプル要因となったことは明白である。リー＝クアンユー上級相（前首相）は、「外来人材を受け入れなければ、我が国は二三流国家に成り下がってしまう」という旨の発言で、次のように述べた。

中国は13億の人口があり、必要な人材を提供することができます。私たちは、300万の人口だけですから、卓球やバドミントンの選手だけでなく、その一部の人材が来るのを受け入れなければならないのです。私たちは、彼らを歓迎しなければなりません。（*聯合早報* 2002/8/17）

しかし、中国人を実際にどのくらい永住者化・市民化したかは、統計的には分からない。先に述べたように、永住者化・市民化した移民の出身国別一覧が、公表されていないからだ。

ただし、その一端については、華人住民の方言集団別人口割合を見れば分かる。華人住民は福建や広東など9の方言集団別に分類されているが、どの方言集団にも分類されない「その他」が、9万人以上を占める。その多くが中国北部出身者だと言える（*Census of Population* 2000, 1巻：45）。

見方を変えれば、中国人の永住者・市民の数が単独で明らかにされていないことに、逆に注目しなければならない。中国人は、シンガポール華人、台湾人、香港人と同じく「チャイニーズ」であることが前提にされているのである。その背景には、シンガポールの住民を、「華人」「マレー人」「インド人」「その他」のいずれかに分類する、「多人種主義（*Multiracialism*）」と呼ばれる一連の人種・民族政策がある。次項で、この多人種主義について検討する。

1—3 多人種主義

多人種主義は、シンガポール住民のアイデンティティや文化を全てCMIO (Chinese/Malay/Indian/Others) 別に分けた上で、CMIO別の多様性を強調する、一種の多文化主義政策である⁽⁶⁾。多人種主義政策は、言語政策や住宅政策等で幅広く行われ、住民の生活に直接影響を及ぼし、それから逃れることができない(鍋倉1997:162)。

多人種主義の下、「華人はより華人に、マレー人はよりマレー人に、インド人はよりインド人になるような圧力の下に置かれる」(Benjamin1976:124)が、華人に関して言えば、より華人になるための華人性(チャイニズネス)の核として、華語(中国語)⁽⁷⁾が位置付けられる。一たん華人に分類されれば、実際に華語を用いているかどうかに関わりなく⁽⁸⁾、華語が「母語」とされ、受験に必須の第二言語としてその学習が事実上義務付けられる。1979年に「スピーク・マンダリン」(華語を話そう)キャンペーンが始まって以来現在に至るまで、華語の促進が続けられているが、それには、中国式の「正しい」華語を話すことも含まれる。中国式の「正しい」華語を話す担い手として格好なのが、中国人にはかならない。

多人種主義の下、住民化された中国人、香港人、台湾人は全て、「華人」として登録される。中国人を受け入れることで、単に華人の数を確保するだけでなく、より「正しい」華語を話すより華人的な華人としての質をも確保できるのだ。中国人の受け入れは、多人種主義を強化するにあたって実に都合がいいと言える。

こうして、中国からの移民を多く受け入れ、それを「華人」と分類することによって、「華人」の人材が多数を占めた上で、多人種から成る多様性が謳われる、シンガポールの「多人種」社会が築かれ運営されるのである。多人種主義政策は、国家によってCMIO別のエスニシティさらには人種が強調される政策と言えるが、中国人積極的受け入れの移民政策は、この多人種主義の一環と捉えることができよう。

中国人は、決して少数派のその他・外国人ではなく、中国人=華人として、そのまま受け入れ社会のマジョリティに組み込めることが前提となっている。同じ「チャイニズ」として、移民の中国人は、シンガポール華人との間に溝がないことが前提になっているの

⁽⁶⁾ 「多人種主義 (Multiracialism)」についてはBenjamin (1976)、CMIOについてはSiddique (1990) を参照。

⁽⁷⁾ 現在中国で標準語(普通話)とされている中国語は、シンガポールでは「華語」と呼ばれる。

⁽⁸⁾ 「スピーク・マンダリン」が始まって20年以上経った2000年の統計によれば、シンガポールの華人のうち、家庭で最も話す言語が華語だと答えたのは、45.1%であった。そのほか、華語方言が30.7%、英語が23.9%を占めた(Census of Population 2000, 2巻:98)。なお、1980年の国勢調査では、華人を世帯主とする家族のうち、華語を主に用いるのは13.1%であった(Census of Population 1990, 3巻:6)。

だ。移民とホスト社会の間にギャップはなく、移民をそのままホスト社会のマジョリティに組み込んでいけることを前提にしていたことが、他の移民状況にはない大きな特徴だと言える。

2 シンガポールの中国人

2—1 調査の方法とその位置付け

一方、当のシンガポールの中国人は、中国人と華人について、どう捉えているのだろうか。徹底した移民政策が行われているシンガポールで、自らのシンガポールでの存在が政府によって担保されている中国人移民から、政府の文脈以外の声を聞くのは難しい。こうした中、筆者は、2000年11月から2001年4月にかけて、シンガポールの中国人49人を対象に、パイロット的なアンケート調査を行った。筆者が直接質問したほか、アンケート用紙を渡した中国人留学生3人が質問した。

回答者の内訳は、別表として末尾に載せた。39人が自費留学生、4人が駐在員、3人が労働者、2人が招待留学生、1人がその他であった。これらは、前章のシンガポール政府の移民政策を踏まえれば、次の表のように位置付けることができる。縦軸は、招聘されて来たのか、自費で来たのか、の違いによる分類。横軸は、滞在目的による分類である。

表：シンガポールの中国人の諸類型

		就 職	就 学
招 聘		(1) 政府の招聘、駐在員	(2) 招待留学生
自 費		(3) 外国人労働者	(4) 自費留学生

(1) は、シンガポール政府が優秀な人材として招聘した者及び、民間会社や中国政府が派遣した駐在員である。エンプロイメント（雇用）パス（Employment Pass = EP）が支給される。

(2) は、人材の卵としてシンガポールの学校が中国からスカウトして大学や高専で学ばせる「優秀な学生」である。奨学金などが給付されるかわりに、卒業後一定期間シンガポールで働くことが義務付けられる。学生パスが給付され、アルバイトも認められる。

(3) は、中国から自力で来た労働者で、労働許可証（Work Permission = WP）が給付される。肉体労働などシンガポール人が就きたがらない職業での貴重な労働力を担う。

雇用パス保持者と労働許可証保持者との差は大きく、「人材」視され永住者への道が大きく開かれているのは雇用パス保持者だけで、労働許可証保持者は許可証の更新に制限があるほか、シンガポール人との結婚も制限されるなど、外国人労働者として永住化しないような様々な措置が取られている。

(4) は、自費で来た中国人留学生である。(2) と同じく学生パスが給付されるが、アルバイトは一切認められていないほか、不法就労の温床視され、学修途中でも理由なく更新されず帰国に追い込まれることがあるなど、(2) とは待遇に違いがある。

回答者49人を分類すれば、駐在員4人が(1)に、招待留学生2人が(2)に、労働者3人が(3)に、自費留学生39人が(4)に、その他が1人に分類できる。(4)の自費留学生が多数を占めたが、(1)～(4)のうち、シンガポール政府と最も微妙な関係にあるのが、この自費留学生にほかならない。自費留学生は、他の三つと違い、政府によって直接流入が促進されたのではなく、パスの有効期間が最も短いなど最も弱い立場に置かれ、政府の移民政策に最も翻弄される。本稿では以下、調査結果のうち、(4)の自費留学生39人に対する回答から、シンガポールの中国人の態様を明らかにする⁽⁹⁾。

2-2 留学先にシンガポールを選んだ理由

留学先にシンガポールを選んだ理由として、39人から47件の回答を得た⁽¹⁰⁾。このうち最も多かったのが、「手続きの簡単さ」の17件で、これは、先に述べたシンガポール政府の中国人積極受け入れの移民人口政策と関係している。

次に多かったのが「シンガポールの華人性」の13件で、「華人が多いから」「華語(中国語)が話せるから」「華語の家庭教師ができるから」というように、シンガポールが華人社会であることが理由に挙げられた。華人が多数を占める「華人社会」であることが、シンガポールが中国人をひきつける重要な要素になっていたのである。移民先のホスト社会のマジョリティとエスニシティを同じくするという、シンガポールの中国人が他の移民状況とは異なる点がここに表われている⁽¹¹⁾。

シンガポールが華人社会であることが大きな働きをしていることは、先に述べた、中国

⁽⁹⁾ 留学生を一時滞在者と見なして移民に含めないことが多いが、永住や就労する意図ある者にとっても、留学生はとりえず所属するための格好の身分であり、最終的には永住するかもしれず、移民から排除できない。事実、回答した39人の自費留学生のうち、7人が留学が目的ではなく、永住・就労・結婚が目的だとはっきり回答した。

⁽¹⁰⁾ 以下の回答は全て複数回答を含めている。

⁽¹¹⁾ このほかには、「清潔で治安がよいから」、「エージェントの紹介」、「親戚がいる」「友人が行くから」「英語を学ぶ」「職を探せる」という回答が挙げられた。

人＝華人とする多人種主義に基づいた中国人の積極的な受け入れ策と同じ文脈に位置付けられる。中国人とシンガポール華人との間にギャップがないことが、シンガポールと中国人の双方で前提となっていたと言える。

2—3 中国人が見た、中国人と華人

それでは、中国人とシンガポール華人との間にはどのような共通点と相違点があるのだろうか。

中国人留学生が挙げた共通点として、33件の回答を得た。このうち、「どちらも華人」「外観が同じ」「人種が同じ」「祖先が同じ」という、どちらもチャイニーズとしての、言わば人種的・先天的・原初的共通点を挙げた回答が、31件とほとんどを占めた。「黄色い皮膚と黒い頭髮」という、中国政府が好む「中華民族」のイデオロギーがそのまま用いられているのである。これは、先に述べた中国人＝華人というシンガポールへ行った動機と、軌を一にする。

逆に違う点としては、44件の回答を得たが、このうち「言語」が18件と最も多く、「人の考え方や態度」が14件で続いた。先の「同じ点」で、人種的・先天的・原初的理由がほとんどを占めたのとは対照的に、社会的・後天的理由が回答のほとんどを占めている⁽¹²⁾。同じはずの華人と中国人が、実際の社会生活では様々に異なっていることを感じていることが読み取れる。

続いて、自分が中国人であることで有利な点・不利な点を挙げてもらった。有利な点に関しては、39件の回答のうち、「有利な点はない」という回答が18件を占めた。残りの21件のうち19件が、「中国語ができる・教えられる」を有利な点として挙げた。先に述べた、華語を華人性の核として位置付ける多人種主義の影響がここにも表れている。

不利な点としては、41件の回答のうち、制度面を挙げる人が25件と多かった。これは、学生パスの更新に対する不安など、政府の移民政策に翻弄されていることを反映している。続いて、「英語ができない」「人に見下される」というように、シンガポール人（とくに華人）との対人状況下で不利だと感じる回答が13件と多かった。日常生活でのシンガポール華人との間に生じる溝がうかがえる。不利な点はないと答えたのは、2件だけであった⁽¹³⁾。

とくに質問項目を設けたわけではないにも関わらず、回答者の三分の一が、シンガポー

⁽¹²⁾ その他は「生活習慣」7件、「外観」3件、「教育」2件で、少なくとも「外観」以外は、社会的・後天的理由である。

⁽¹³⁾ その他の回答が1件あった。

ル人に見下されていることに言及した。その内容を一部記す⁽¹⁴⁾。

「大部分のシンガポール人は、中国人を見下している（看不起中国人）。とくに中国人女性は、結婚目当てで来ているのだろうと見下される。」

「シンガポール華人には、中国人を見下す失礼な者がいる。中国人と他の外国人とでは、扱いが違う。シンガポール人は、教育を受け洗練されていると思っていたので、こんな人がいるとは思わなかった。」

「私が中国人なので、私に会った時、華語が話せるのにわざと話さない人がいる。」⁽¹⁵⁾

「綺麗な格好をしていると、悪いことをする女性だと見なされる。」

「買い物の時など、私の発音は中国人式なので、すぐに私が中国人だと分かってしまう。しかし、中国人だと知られても、私は、中国人式の発音を、シンガポール華人式に改めるつもりはない。」

同じく質問項目を設けたわけではないが、回答者のうち16人がシンガポール人を見下すような言い方をした。発言の内容を一部記す。

「中国人は頭がいい。シンガポール人とは考え方が違う。中国人は物事を多様に考えることができるが、シンガポール人は、多くのことが考えられない。」

「シンガポールは、言葉が標準でない。例えば、『我先走先』や『吃飽了没？』などと言う。『我先走』『吃飽了？』と言うべきなのに。」

「シンガポール人はよくない。実際には何も持っていないのに、とてもおごっている。華文は悪いし、英語も標準でない。」

「中国人はとても親切なのに、シンガポール人は、度量がとても小さい。」

「シンガポール人とは交わりたくない。」⁽¹⁶⁾

シンガポールが華人社会で、中国人とシンガポール華人との間にギャップがないことが、前提となっていた。しかし実際にシンガポールに来ることで、中国人と華人の間の差異が強調され、ギャップが大きくなっていると言えよう。

⁽¹⁴⁾ 以下は内容のごく一部で、とくに露骨な差別表現は割愛した。

⁽¹⁵⁾ 華人で華語が話せるのに、中国人相手だと故意に英語を用いる人がいる、ということ。

⁽¹⁶⁾ なお、回答者のうち38人全員が、友人は中国人が多いと答えた。

3 中国人とシンガポール華人の関係

3—1 シンガポール華人から見た、中国人と華人

一方、シンガポール側から見た場合、中国人はどのように捉えられているのだろうか。シンガポールの現地紙とくに華字紙において、最近シンガポールの中国人関係の記事をよく見かける。風呂場で盗撮を試みたシンガポール華人の家主を中国人留学生が訴えるといった単発の記事が夕刊紙⁽¹⁷⁾の一面を大きく飾るだけでなく、一つの記事が出た後、その反響など関係記事が朝夕刊紙あわせてしばらく続くことが、この問題のシンガポールでの関心の高さを示している。

例えば、中国出身のシンガポールバドミントンチームの選手と、シンガポール人店主との罵り合いが、2002年8月24日から数日、華字紙を中心に大きく取り上げられ、夕刊紙では、一面を連日賑わした。

少し前では、シンガポール華人は華人意識が足りない、と中国人社会学者が新聞紙上で述べる (Straits Times 1999/12/14) と、シンガポール華人の反発を引き起こした。あるシンガポール華人は、「この記事を読んだ瞬間、『マジュラシンガブラ』という (マレー語の) シンガポール国歌が頭をよぎった」と言った。

また、シンガポール留学経験のある中国人女性作家が、『烏鴉 (カラス)』というシンガポールを舞台にした自伝風の小説を中国で発表すると、シンガポールで大きな反響を呼んだ。中国人の主人公が、自費留学生としてシンガポールにやって来て、英語学校に学生として所属しながら、要人の愛人、売春等を経て、不法就労が発覚し、最後は愛人を海に沈めるというストーリーの中で、登場人物の中国人たちは、次のような科白を続ける。

「シンガポールでは、私たち中国から来た女性は「小竜女」と呼ばれる。... 小竜女とはすなわち売春婦のこと。」(p1)

「私たち (中国人) は、上から下まで、彼ら (シンガポール人) とは、全く違う」(p256)。

この科白は、私が聴き取った中国人留学生の言葉と、表現は違うが内容は同じだ。シン

⁽¹⁷⁾ シンガポールでは現在、政府系の一社しか新聞社がないと言ってよい。英語、華語、マレー語、タミル語の公用4言語でそれぞれ朝刊紙を発行しているほか、夕刊として、英字紙1紙と、華字紙2紙を発行している。政府のオフィシャルペーパーでしかない朝刊に比べて、夕刊の方が読者の関心に応えようとする姿勢が若干見られる。

ガポールで現在日常的に感じられる、シンガポール華人と中国人との軋轢が、生々しく率直に書かれていることが、反響を呼ぶ理由となったのである。夕刊紙は連日一面トップで『烏鴉』関係の特集を組んだほか、朝刊紙でも投書欄に連日『烏鴉』バッシングの投書が載った。

3—2 シンガポールの日常風景での中国人

シンガポールでは現在、中国人を見かけることが多いが、以下は、筆者が見かけた事例の具体的描写である。

郵便局で、大荷物を梱包中の若い女性が、「請給我胶条」（テープをください）と、郵便局でインド人風の郵便局員にいきなり中国語で話しかけ、郵便局員が戸惑いの表情を見せた。華人だけでなく、マレー人、インド人などが共に暮す多人種社会シンガポールで、各人種間の区別に敏感なシンガポール華人や隣国のマレーシア華人であれば、決してインド人風の人物に中国語（華語）で話しかけたりはしない。シンガポールでこれは実に異様な光景である。そしてこの異様さの主である若い女性が中国人であるという認識が、華人、マレー人、インド人を含めたその場に居合わせた全員によって共有される。

また、筆者がシンガポールでタクシーに乗ると、不機嫌な華人運転手が多かった。筆者を中国人だと勘違いしたのである。ある運転手は、筆者に下手な英語で行き先を尋ねた。この運転手は英語よりも華語が得意なことは、華語放送のラジオを流していることから明らかである。同じく下手な英語で応答する筆者と、英語での奇妙なコミュニケーションが続いた。筆者を中国人だと見なしているなら華語で話せばいいように思うが、中国人相手に自分の「標準」でない華語を用いたがらず、中国人よりは上手だと信じている奇妙な英語を用いたがるところに、シンガポール華人の中国人に対する複雑な反応が表われている。そして、筆者が日本人だと知るや、運転手は「なんだ日本人なのか、中国から来たのだと思った」などと言って急に打ち解けたように愛想よく話し出すのだった。

シンガポール華人の老人たちの道端でのおしゃべりでは、近所に最近住み始めた中国人女性のことを皆で非難していた。その子供が名前を付けずに「オイ、オイ」と呼んだことがきっかけで確執が生じ、ついにはその女性に「中国人がシンガポールに来てシンガポール人に敬意を払わないのはどういうことだ」というようなことを言ってやったと、老人の一人は得意げに話した。そこへ、同じく近所に住むマレー人の老人が通りかかり、老人たちとマレー語で親しげに話し始めた。華人の老人たちは、中国人よりもマレー人の方が自分たちに近いと見なしているようであった。

4 本稿の事例から

4—1 多人種主義のゆらぎ

以上の事例は、まず多文化主義に関して、次のような意味がある。従来のシンガポールでは、華人と非華人を対比し、両者の軋轢を問題にすることが多かった。そして、この軋轢を利用して華人と非華人を巧みに分割していたのが、先に述べた多人種主義政策であった。中国人の大量受け入れも、華人性の強化として、多人種主義政策の強化の一環だと捉えられる。しかし、多人種主義の強化によって多人種主義がゆらぐという意図せざる結果が生じている。すなわち、中国人を大量に受け入れて多人種主義を強化した結果、多人種主義の下では同じ「華人」に括られるはずだった中国人とシンガポール華人との間に溝が生じ、その分類を無意味にしているのである。中国人学者への憤りから「マジュラシンガブラ」が頭によぎったシンガポール華人や、中国人の隣人よりもマレー人の隣人と親しく話をする老人のように、中国人よりもむしろ、シンガポールのマレー人やインド人の方を自分たちに近いとも見なし始めることすらあるのだ⁽¹⁸⁾。

一方、多人種主義のゆらぎを巧みに自分のものにしているのが、中国人留学生である。そもそも、多人種主義は、中国人大量受け入れのプル要因として働いていた。さらに、多人種主義において華人の「母語」として促進される華語が、現実には多くの場合において母語ではない。この乖離の結果、華語を「母語」として教える教師が必要となり、「母」代わりに「母語」を教える家庭教師として、中国人留学生が重宝されているのである。ある中国人留学生は、週のべ25軒の家庭教師を掛け持ちし、シンガポール中を飛び回っていた。多人種主義の現実との乖離が、シンガポールでの留学費用の貴重な資源となっているのである。

4—2 華人と中国人について

最後に、華人と中国人の関係について整理し、今後の課題について明らかにする一助としたい。

華人と中国人に関する研究としては、中国外で育った華人の中国訪問をとり上げた研究

⁽¹⁸⁾ しかし、2001年9月11日のテロ事件後、非イスラム対イスラムという図式が、非イスラム＝華人と、イスラム＝マレー人（非華人の代表）を対比させる際の格好の図式として利用されている。この図式が多人種主義強化にとって都合がいいことは言うまでもない。

(Ang 1993, Louie 2000など)がある。この場合、中国におけるマジョリティのネーションとしての中国人に対して、中国外のエスニック・マイノリティとして華人が位置付けられる。華人は中国外の所属国家でマイノリティである上に、中国に赴いても中国語が話せないことなどから、マイノリティ化される。これは、単に中国というネーション・ステートにおけるマイノリティであるだけでなく、チャイニーズネスにおいてもマイノリティ化される。

これに対して、本稿でとり上げた事例は、シンガポールにいるマジョリティとしての華人に対する、中国人である。中国人はそもそも所属国家においてマジョリティのネーションであった。それが、シンガポールにおいてもチャイニーズとしてマジョリティに位置付けられるはずだったのが、実際には華人及び中国人自身の双方でマイノリティ化されていることが明らかになった。しかし、単にそのままマイノリティ化されないのがこの事例の特徴である。多人種主義における分類上はマジョリティと同じく華人である上に、華語に見られるように、よりチャイニーズネスを体現する者として位置付けられる。シンガポールというネーション・ステートにおいてマイノリティであるはずの中国人が、実は背後のチャイニーズとしてのネーション・ステートとしてはより大きな中国を抱えているという点では、マイノリティでなく、ここにねじれ現象が生じているのである。

むすびに

以上述べてきたことをまとめると、まず中国からの人口移動のプル要因として、多人種主義に基づいた、シンガポール政府の中国人受け入れ政策があった。これは、人種別の違いを強調する多人種主義の延長で、ステートによる、エスニシティさらには人種の強化だと言える。前提には、華人＝中国人というエスニシティ・人種観があった。

一方、シンガポールの中国人自身も、中国人＝華人ということが、シンガポールを選んだ有力な理由となっていた。しかし、シンガポールへ行ってみると、中国人と華人の差異が強調されるようになった。

同様に、シンガポール華人も、中国人との差異が強調され、同じシンガポール人というネーションを共有する者として、マレー人やインド人との親近感が芽生えているとも言える。

これは、ステートによるエスニシティの差異の強調の結果、むしろネーションの差異が強調され、エスニシティの差異の強調が薄まる、という意図しない結果が生じていると考えられる。

本稿で用いたのは、あくまでパイロット的な調査であるが、それをベースに、中国人、シンガポール華人、政府の関係をもっと洗練化して捉え、移民研究やエスニシティ研究、華人研究など様々な研究と結びつけ、これらの諸研究に新しい視点を提供していくことが、本稿に課せられた課題であろう。

(本稿は、財団法人 松下国際財団「松下アジアスカラシップ」の助成を受けた研究「シンガポール『多人種主義』に関する比較社会学的研究」の成果の一部である。)

引用資料文献

統計資料

『新中建交十年1990-2000』、新加坡新中友好協会・中国中新友好協会

Census of Population 1990, 3 巻、Singapore Department of Statistics

Census of Population 2000, 1 巻 (Demographic Characteristics)、2 巻 (Education, Language and Religion)、Singapore Department of Statistics

引用文献

綾部恒雄・石井米雄 (編)、1994、『もっと知りたいシンガポール第二版』、弘文堂

鍋倉聰、1997、「多文化主義におけるエスニシティの編成」、『京都社会学年報』第5号

鄧小平、1993、『鄧小平文選』第三巻、北京：人民出版社

九丹、2001、『烏鴉』、武漢：長江文芸出版社

Ang, Ien, 1993, "To Be or Not to Be Chinese: Diaspora, Culture and Postmodern Ethnicity", in *Southeast Asian Journal of Social Science*, 21-1

Benjamin, Geoffrey, 1976, "The Cultural Logic of Singapore's 'Multiracialism'", in Hassan, Riaz (ed), *Singapore: Society in Transition*, Kuala Lumpur: Oxford University Press

Louie, Andrea, 2000, "Re-Territorializing Transnationalism: Chinese Americans and the Chinese Motherland", in *American Ethnologist*, 27-3

Siddique, Sharon, 1990, "The Phenomenology of Ethnicity: A Singapore Case-Study", in *Sojourn*, 5-1

別表：被調査者一覧

番号	年 齢	性別	出身地	タイプ	番号	年 齢	性別	出身地	タイプ
01	20代前半	女	北京	自費留学生	26	20代前半	女	昆明	自費留学生
02	20代後半	女	北京	自費留学生	27	20代前半	女	広州	自費留学生
03	20代前半	女	北京	自費留学生	28	20代前半	男	福建	就労
04	20代前半	女	福州	自費留学生	29	20代後半	女	無錫	招待留学生
05	20代後半	女	北京	自費留学生	30	20代前半	女	上海	自費留学生
06	20代前半	女	上海	自費留学生	31	10代	男	北京	自費留学生
07	20代前半	男	沈陽	自費留学生	32	20代前半	女	北京	自費留学生
08	10代	女	沈陽	自費留学生	33	20代後半	男	江蘇	駐在員
09	20代前半	女	沈陽	自費留学生	34	20代後半	男	江蘇	駐在員
10	10代	女	無錫	招待留学生	35	20代後半	男	江蘇	駐在員
11	20代前半	男	上海	自費留学生	36	20代前半	女	昆明	自費留学生
12	30代	女	上海	駐在員	37	20代前半	女	上海	自費留学生
13	20代後半	女	四川	自費留学生	38	10代	女	上海	自費留学生
14	20代後半	女	南昌	自費留学生	39	20代前半	女	上海	自費留学生
15	20代前半	男	成都	自費留学生	40	30代	女	北京	付き添い
16	20代前半	女	天津	自費留学生	41	20代前半	女	上海	自費留学生
17	20代前半	女	南京	自費留学生	42	20代後半	男	武漢	就労
18	20代前半	男	無錫	自費留学生	43	20代前半	女	上海	自費留学生
19	20代後半	男	大連	自費留学生	44	20代前半	女	上海	自費留学生
20	30代	男	山東	就労	45	20代前半	女	上海	自費留学生
21	20代前半	男	上海	自費留学生	46	20代前半	女	無錫	自費留学生
22	20代前半	女	上海	自費留学生	47	20代後半	女	黒竜江	自費留学生
23	20代前半	女	天津	自費留学生	48	20代後半	女	吉林	自費留学生
24	20代後半	男	上海	自費留学生	49	20代前半	女	長春	自費留学生
25	20代前半	女	大連	自費留学生					

(なべくら さとし・滋賀大学経済学部講師)

A Case Study of Chinese Nationals in Singapore

Satoshi NABEKURA

Singapore is known as a multi-racial society that consists of Chinese, Malay, Indian and Others. Today we can see a new group known as 'Chinese Nationals', who are new immigrants from China. The fact that the majority of the host society Singapore and immigrants to Singapore share the same ethnicity of Chinese is unique.

From my pilot survey conducted in Singapore, I found that the sameness of ethnicity played a very important part in attracting immigrants to Singapore, but both Chinese Nationals and Chinese Singaporeans found differences amongst each other after meeting in Singapore. Some Chinese Nationals said that they are looked down upon by Chinese Singaporeans, and that they also look down on Chinese Singaporeans themselves. More interestingly, some Chinese Singaporeans felt Malay Singaporeans to be nearer to themselves than Chinese Nationals.

This shows unintended consequences of the migration policy based on the sameness of Chinese and the ethnic policy in general that emphasizes distinction between ethnic groups. From this case we can also see interesting relations between ethnicity, nation(ality) and nation-state. Consequences of the state emphasizing ethnicity include difference of nation rather than ethnicity being emphasized, and the distinction of ethnicity in nation-state being reduced.